

住井すゑ『橋のない川』の基本構造 「立志小説」という観点

千金楽 健

はじめに

作家、住井すゑは一九〇二（明治三五）年に奈良県磯城郡に生まれ、一九二一（大正一〇）年に初の小説『相剋』（表現社）を刊行して以来、長きに渡る作家活動の後に、一九九七（平成九）年に茨城県牛久市の自宅で没した。享年九五歳、自身の代表作である『橋のない川』第八部の執筆にちょうど取り掛かるころであった。

『橋のない川』は住井すゑの代表作であるだけでなく、差別問題、人権問題をめぐる歴史の中でも言及されることの多い社会的意義の大きな作品である。しかしながら、近現代文学史の流れにおいてはいまだその正当な位置づけは定まっておらず、作品の文学的研究もほとんどなされてこなかったというのが現実である。八〇〇万部を超えるベストセラーであり、広く名を知られる作品であるにも関わらず評価が遅れているのはなぜなのか。

執筆にかかった時間もさることながら、作品内の時間の流れも

中心人物の幼少期から青年期までと長く、また、その他の登場人物の数、扱われる歴史的事件、あるいはその中で示される幾つもの思想、信条、社会的事象への解釈などはいずれも膨大であり、本論でそれらすべてにわたって詳細な検討を行うことはできない。本論の目的は『橋のない川』を改めて評価するにあたってどのような観点があり得るかを作品の基本的な構造を見直すことで示し、今後の方針を定めることにある。

作品発表の経緯と全体像

『橋のない川』は第一部が一九五九（昭和三四）年に部落問題研究所の雑誌「部落」に連載されて以来、事実上の最終部に当たる第七部が刊行される一九九二（平成四）年まで、かなりの長期にわたって書き続けられた大長編小説である。第一部以外は書下ろしの形式が取られ、単行本はいずれも新潮社から刊行された。当初の予定では一九六一（昭和三六）年の第二部を以て完結するはずであったが、一九六三（昭和三八）年に第三部、翌年に第四

部が刊行されたことで、作品の中心的人物である「孝二」の年齢に合わせて、前二部を「少年篇」、後二部を「青年篇」とする四部作の構成へと変更された。

さらに一九七〇（昭和四五）年に第五部が、七三（昭和四八）年に第六部が続編として発表されたことで、『橋のない川』は初期の予定を超えた長大な物語へと変貌、発展を遂げてゆく。

『刊行年一覧』

一九五九（昭和三四）『橋のない川』を部落問題研究所「部落」に連載。

一九六〇（昭和三五）『橋のない川』（第一部に相当）を新潮社から刊行。

一九六一（昭和三六）『第二部』を新潮社から刊行。最初の完結予定。

一九六三（昭和三八）『第三部』を新潮社から刊行。

一九六四（昭和三八）『第四部』を新潮社から刊行。二度目の完結予定。

一九七〇（昭和四五）『第五部』を新潮社から刊行。

一九七三（昭和四八）『第六部』を新潮社から刊行。

一九九二（平成四）『第七部』を新潮社から刊行。事実上の最終巻。

第六部、しばらく期間を置いた第七部の刊行を経て第八部が書き継がれるはずであったことを考えると、住井すゑの後半生をかけたまさに文字通りのライフワークと呼ぶべき作品であることがわかる。もっとも発表の経緯を踏まえるならば、続編を書き継ぐ

中で作品を自らのライフワークとして成長させたという方が適切かもしれない。

全体的に文章は平易であり、複雑な概念や難解な語彙、あるいは固有名詞などが用いられる際には概ね地の文での説明がなされるか、登場人物の発言を通して解説される仕組みとなっており、読者が困難を覚えることはほとんどない。文体や表現で勝負をかけるというより、あくまでも物語、そして典型化されてはいるものの、特定の視点を持った人物を通して物事を理解する、というのが『橋のない川』の外形的な特徴である。

周知の通り、この作品の主題は部落問題の告発と批判であり、さらに広範な差別問題、貧困問題、そして軍国体制と一体となった天皇制への批判、日本という国の体制そのものへの批判にまで及んでいる。これらの主題は一読して明らかであり疑問の余地はない。

不思議なのはこれほど大規模で深刻なテーマを一貫して取り扱っているにも関わらず、なぜか作品全体のトーンに一種の明るさがあり、読者が暗い雰囲気落ち込まずに作品を読み進めることができるということである。この不思議な明るさが広範囲の、そして長期にわたる読者を獲得させる要因の一つでもある。たとえば作品集第四巻の月報に教員の木村孝子氏から次のような言葉が寄せられている。

あまりにも有名な『橋のない川』の書名を私はなんとたびたび耳にしながら年月を重ねたことでしょう。しかし、部落、差別という暗い響きが私をこの本に近づけることを妨げてい

ました。(略) 思っていたような暗い本では全くありませんでした。(略)

この感覚は特に『橋のない川』という名と概略だけを知っていた読者には特に共通して感じられるものと言って良い。中心人物である「孝二」の活躍、あるいは、苦境にあつても屈しない闘志、さらには、予見力や、次々に拡大してゆく知識といったものにひっぱられるように、読者はかなりの速度と安定をもつて物語を読み進めることができる。『橋のない川』には全く救いのない「悲惨」と「絶望」は描かれていない。これを欠点・短所であると思ふことはもちろん可能であるが、そうした指摘はあまり意味のあることとは言えない。というのは、『橋のない川』の作品としての使命は差別や制度といった社会問題を可視化して示すことであり、その先にある希望を描いて見せることだからである。作品の事実上の完結点にあたる第七部の末尾も次のように結ばれている。

「一九二八年」の日づけが、孝二には開いた窓のように清々しかった。

「そうや、新しい歴史がはじまるんや。いいや、これから自分の力で、新しい歴史を創り出すんや。周囲眼にはつまらぬことに見えても……」(略)

午後一時。春を含んだ陽射の中で、何の小鳥か、しきりにさえずっていた。

第七部の末尾に限らず、第二部、第四部、第五部といった一度は結末として想定された「終わり」の部分もおおむね希望を抱い

て次につながるかのように仕掛けられている。特に、一つのクライマックスとなる第三部・第四部は全国水平社の設立を扱いながら、その宣言にある「人の世に光あれ」の言葉が全篇を貫く一つの強いメッセージとして働き、「明るい」印象を与えている。そしてこうした希望的ともいえる内容を読者に伝達する役目を負うのが、全体を通して中心となる人物、「孝二」である。

中心人物・孝二

作品の中心人物である「孝二」がどのような資質の持ち主であるかは第一部の冒頭で次のようになり明確な形で語られている。

「おふで、誠太郎もなかなか見込みがある子やけど、孝二ときたら、まだ上かもわからぬで」

(略)「さよですネ。孝二は、もう上手に平仮名書きまんネ。同じ一年生の中には、片仮名かてまだよう書かぬ子もいますやろに。」

「うんと、仕込んでやりたいもんやな。」(略)「学問さえありや、どねんでも出来る。」

母と祖母の会話による「孝二」評であるが、ここに示された内容は単なるひいき目ではなく、また、何らかの含みをもったものでもない。「孝二」は言葉通りの意味で極めて賢い子供であり、行動力も人望もある優秀な少年として登場し、いわば「選ばれた子」としての立場が与えられている。読者はこの「選ばれた子」の視点に寄り添うように作中で描かれる各種の事態を追ってゆく

ことになるのだが、興味深いのは「孝二」の年齢が作者である住井すゑのそれと一致するように設定されていることである。

住井すゑが『橋のない川』を書き起こす契機となったのは一九五七（昭和三三）年に部落問題研究所の木村京太郎氏と出会ったこと^①であると考えられている。作中で「孝二」が受ける差別体験、あるいはそれにまつわる各種の知識や認識の広がりと言った経験が木村京太郎氏の体験に依拠し、その内容が大きく反映されていることは疑いない。しかし、「孝二」という人物には住井すゑ自身の経験や記憶、あるいは思い入れが多分に影響を及ぼし、一部は重なりあっていると考えた方が自然である。

作家と作品の関係をどのように取り扱うかは重要な問題であるが、『橋のない川』と住井すゑに関する限り両者を切り分けて考えることは困難である。もちろん、作中で語られる思想や心情をそのまま作者のそれと安易に一体化することは慎まねばならないが、それでも『橋のない川』に関連する住井すゑ自身の発言、自作への解釈、そして何より末期に至るまで続編を書き続けようとしていた意志などを考えればある程度以上の関連を認めた方がわかりやすい。

住井すゑという作家

作品と作家との結びつきを考える上で興味深い証言が残されている。一九一三（大正二）年、小学校の卒業式に際してのことである。本来は男子児童の分担であるはずの卒業生への送辞を「成績は私がいちばんだから」という理由で担当したということ、そ

して翌年、小学校を首席卒業した後、「高等女学校に進学したかった」が、家庭の事情によって「技芸女学校に進学した」という二つのエピソードである^②。

住井すゑはその直後に博文館の雑誌「少女世界」、「文章世界」への投稿を通して後の夫となる犬田卯と文通し、作家への道を歩み始めることになるのだが、重要なのは、小学生当時からかなり強い自負心を抱いていたこと、そして、その自負心に足るだけの能力を持ち合わせており、文字通り、自らの力で苦境を切り開き、進学に代わる目標、すなわち作家として生きることを自力で達成してしまったということである。

作品に描かれる「孝二」の体験そのものは住井すゑのそれとは大きく異なる。しかし「孝二」の精神的な状態、感情の描写には少なからず住井すゑ自身の記憶と体験とが反映されていると見ることは許されるのではないだろうか。特に抑圧された状況で感じる想いあるいは鬱屈、反対に向学心の発露や努力を厭わない生き方などの描写には住井すゑ自身の経験が投影され、それが「孝二」の存在にリアリティを与えているように思われてならない。

いずれにしても、住井すゑは文字通り、腕一本、筆一本で生活を支え続け、それは生涯を通じて変わることが無かった。犬田卯との結婚後も住井すゑは自らの力を存分に発揮して生活を支え続けた。間違いなく、住井すゑ本人は向上心と努力の人であり、刻苦勉励の人であり、自力で地位を確立した人物なのである。

これらの事柄に加えてさらにもう一つ、作家と作品を結び付ける要素を探ってゆくと、『橋のない川』という作品を根底で支え

る構造体が明らかになってくる。それは、住井すゑの作家としてのキャリアの開始とほぼ同時代に始まった、近代文学史のある一つの流れと重なっている。

住井すゑと講談社文化

一九一九（大正八）年、住井すゑは講談社の婦人記者募集に応じ採用される。一年ほどで退職することになるのだが、記者時代には看板雑誌「講談倶楽部」の広告作成を担当し、当時から評判になっていたということを本人が回想している。退職の理由は野間社長とのトラブルであったとされているが、ちょうど前後して犬田卯が筆禍事件によって失職し、住井すゑがそれを支えなければならぬ事態となっていたため、退職の決断はかなり重大だったようである。

冒頭で『相剋』によって作家としてデビューしたことに触れたが、より正確には正式デビューの直前にあたるこの時点で、住井すゑは「筆名」によって「童話」を複数執筆し、生活費に充てていたということが判っている。その筆名がどのようなものであり、書かれた作品が何であるかは現時点では判然としないが、住井すゑの作家としてのキャリアは生活苦の中で童話を執筆することによって始められたのである。

住井すゑが在職・退職した当時、講談社は野間清治社長のもと「立身出世主義」を堂々と掲げていた。これは講談社の一大編集方針であったが、当時の世相もまたこの方針を是とし積極的に受け入れた。野間社長の思想的基盤に端を発する方針であることは

確かだが、共鳴する読者層の動きがなければ販売戦略は成り立たない。実際に講談社の雑誌、出版物は爆発的に売れた。「立身出世主義」は出版社側が一方的に煽り立てたものというよりも、読者層と一体となって浸透し拡大を続けた全体的なブームだったのである。⁽⁵⁾

短期間のうちに記者としての立場を捨てることとなったため、住井すゑが講談社の文化圏そのものと一体の活動をしていたとまでは言えないが、少なくとも「立身出世主義」を始めとした編集の方針や周辺の文化とはかなりの程度親しんでいたと考えることはできる。この、童話の創作と講談社の文化との接近という二点に『橋のない川』の構造を理解する一種の秘密の鍵が潜んでいる。

「少年倶楽部」と「熱血痛快」

講談社の雑誌の一つに「少年倶楽部」がある。一九一四（大正三）年に創刊され、後に七五万部の発行部数を示すことになる少年向け雑誌の代表格である。当初、売り上げの不振に悩まされていた「少年倶楽部」は野間社長の督励と一九二一（大正十）年に新たに編集長に就任した加藤謙一のもとで二つの画期的な方針を打ち出した。一つは当時の一流大衆小説家を新たに少年向け小説の作家として起用すること、もう一つが「熱血痛快」とよばれる標語を設定することである。この方針による初期の代表例としては一九二五（大正十四）年の吉川英治『神州天馬俠』、一九二七（昭和二）年の大佛次郎『角兵衛獅子』などが知られている。⁽⁶⁾

「一流大衆小説家」がどのような作家であるかは売り上げ等から明らかであるとしても、「熱血痛快」の具体的な要素がどのようなものであるかは曖昧である。従来の娯楽小説、あるいは少年向けの読み物にもこの要素は含まれていたはずである。このスローガンの設定が戦略的に見事なのは、諸作品が持つ雰囲気單純にしてわかりやすい名を与えたという点である。構成要素を具体的にリスト化することができなくとも、読者が、作者が、あるいは編集者が「熱血痛快」というキーワードを得たことで新出の作品に対して適不適の判断を下し、一つのカテゴリーを形成することが可能となるためである。一種のマジックワードであるが、これは間違ひなく成功を収めた。この手法の結果として「少年倶楽部」は少年雑誌市場を圧倒的ともいふべき勢いで制圧してゆくことになる。そしてその決定的な転換点となったのが、佐藤紅緑による『ああ玉杯に花うけて』の登場であった。この作品はいま述べた二つの方針、すなわち大衆小説家の起用と「熱血痛快」に、「立身出世主義」を結合させたものである。

佐藤紅緑『ああ玉杯に花うけて』

『ああ玉杯に花うけて』（以下、「玉杯」と略記）は一九二七（昭和二）年に雑誌「少年倶楽部」に連載され、その後の少年文学の一つの潮流を確立した作品である。タイトルは旧制第一高等学校の寮歌「嗚呼玉杯」の歌い出しの文言から取られ、作中でも少年たちが寮歌を歌う場面が数度にわたって登場する。

この作品によって「少年倶楽部」の発行部数は三十万部から四

五万部に延び、連載終了後に単行本化される際には初版一万部が準備された。これは当時の標準の二倍強にあたる部数である。『玉杯』は少年たちの心を確実に掴み、その強烈な印象はかつての読者たちにとって長く記憶に残るものとなった。

物語は困窮によって中学進学を断念せざるをえない少年「チビ公」が友人たちとの交流や励ましを受けながらやがて苦難の末に「嗚呼玉杯」を歌うこと、つまり、第一高等学校への入学を果たす様を描いたものである。

「少年倶楽部」編集部によって「立志小説」の名が冠された通り、「志」を立てた少年がその「志」と刻苦勉強によってやがて「立身出世」を果たす「熱血痛快」譚である。フィクション性の高い作品ではあるが、少年読者への訴求力は強く、この作品の成功を受けて多くの「立志小説」が作られてゆくことになる。

「チビ公」は父を亡くした後、叔父の豆腐屋で働きながら生活を支えている。彼にとつてまず現在の貧困を克服することが目標としてあり、その先に中学校への進学という第二の目標が据えられている。この段階で「チビ公」に課せられているのは日々努力を続けること、そして、自らの力を信じ、友人と励まし合いながらも決して甘えないという姿勢である。「チビ公」は金持ちの友人から学資の援助を申し出られるが、それはきっぱりと拒絶する。「敵役」として自らの恵まれた境遇に甘えた人物が設定されていることも考えると、『玉杯』のメッセージが自助努力による立身出世の肯定であることは明らかである。

寮生として「嗚呼玉杯」を歌うことで「チビ公」の「立身出

世」は完成することになるが、この目標は当時の少年読者たちにとつても普遍的な価値をもつものであった。先に講談社の方針としての「立身出世主義」に触れたが、この時代の少年たちは高学歴を手にし、社会の秩序の中で栄達することを疑いのない成功として見做していたはずである。

もちろん、現実的には高学歴を得て「立身出世」を達成することとは容易ではない。容易ではないからこそ、物語として機能する。この現実の当事者と憧れの関係は、ちょうど高校野球の選手と甲子園の構図が類比的である。つまり、優勝、あるいは甲子園出場が困難でありながら大会に参加し、後年「甲子園を目指していた」ことを懐かしく振り返る構図である。僅かな「立身出世」の成功者を膨大な全体の参加人数が支え、成功者たちに自己の夢をいわば代理的に投影することで成立する全体的なシステムがここにある。

少年たちが「チビ公」に感情移入し、苦境に打ち勝つ姿や恵まれた友人関係やその結果としての成功に引き込まれるのは、それが遠い憧れでありながら、かつ、身近であるという一種の二律背反によるところが大きい。「チビ公」は、たとえば『橋のない川』の「孝二」がそうであるように、一種の「選ばれた子」としての資質を与えられている。彼は貧困の前に学校一の秀才であり、働き者であり、また、苦境に屈しない強さを持っている。同時に、あくまでも「チビ公」は市井の少年であり、当時の少年たちが身近に見ていたであろう貧困とそれに起因する困難や苦悩を抱えている。このバランスをいかにとるかが重要である。作品世界と現

実世界が巧妙にリンクしたとき、フィクション性が覆い隠され、物語が完成する。これは時代劇や探偵もの、軍事冒険やSFといった物語の主人公たちに感情移入する場合と決定的に異なる。『玉杯』の大成功は、当時の風潮としての「立身出世主義」を「熱血痛快」のシステムの中で運用したことによる。

『玉杯』には旧制中学との野球の試合や弁論大会といった文字通り「熱血痛快」な展開が用意されているが、重要なのはそうした要素ではない。「チビ公」にとつて、挫折の要因は「父の死」やそれに由来する「貧困」という形を取ってあくまでも外からもたらされる。「熱血痛快」と「立身出世」が両立するには、この外からの阻害要因と、その状況下で努力を重ね境遇に打ち克つことで成功を手にする、という構造が不可欠である。恵まれた境遇下にある少年が主人公では「立身出世」たりにえず、また、己の弱さや脆さを見つめ克己するだけの物語では「熱血痛快」たりえない。これこそが『玉杯』の根幹であり、また、『橋のない川』を構造的に支える基盤でもある。

『橋のない川』作中にはあらゆる形での差別が描き出され、貧困や労働の苦難にも触れられてはいるが、不思議なほど「刻苦勉励」や「努力」に対する疑念は語られない。むしろ、自助努力の肯定と、そうした能力や努力を阻害する存在として差別構造や国家構造が告発される、という形式が見て取れる。先に挙げた「孝二」についての母と祖母の会話の中にも「仕込んでやりたい」「学問さえありゃ」とあることにその一端が表れている。「孝二」もまた「チビ公」と同様に、乗り越えるべき苦難は自身の資質に

よらず外部からもたらされ、それを乗り越える「志」を立て、自ら学問し、努力の果てに「光あれ」の言葉に希望を抱く。このように見ると『橋のない川』は『ああ玉杯に花うけて』と同一の構造を持つことがわかる。『橋のない川』は「立志小説」の系譜上に連なっている。

『立志小説』としての『橋のない川』

『橋のない川』には事件の経緯、米価の変動などが徹底的に調査したうえで書きこまれている他、登場する人物にはそれぞれ具体的な名がつけられ、他にも作物、農作業、自然、家屋の内部、飲食物に至るまで徹底的に細かな描写が行われている。この細部の集積は高い具体性によって読みやすさを確保すると同時に、作中に描き込まれたフィクションの部分、つまり「孝二」に付与された能力、周囲に「良い人」が溢れているといった不自然さを読者に気づかせない程度に覆い隠す効果をも生んでいる。ちょうど『玉杯』が作品世界と現実世界のバランスを取ることで少年たちをひきつけたのと同じ手法である。加えて『橋のない川』の時代設定は刊行当時から数えても半世紀以上前に据えられており、そのことが逆に作中で展開する「孝二」の物語を作り事と思わせずに受け入れることを可能にしている。時代が遠い分だけ現実と虚構の判定が曖昧になり、現実らしさが前面に出るためである。このリアルさを保ちつつ現実と虚構とを絶妙に混交するという特徴は住井すゑが意図したか否かにかかわらず、作品で十分に機能している。

もちろん、共通する手法と基本構造を持ちながら、『玉杯』と『橋のない川』には決定的な違いがある。それはたとえば、『玉杯』の「チビ公」があくまでも立身出世を是とし、学歴と身分が密接な社会制度の中で栄達を目指すものであるのに対し、『橋のない川』の「孝二」が社会制度への疑義を呈し、変革を求めて行動しようとしているという点に明瞭に見ることができ。階級・階層的な社会構造に対するスタンスから考えれば『玉杯』は「立身出世小説」であり、「立志小説」の名は『橋のない川』のほうが相応しいかもしれない。

いずれにしても『橋のない川』を一度「立志小説」として捉え直してみると、作品が持っていた多くの要素が必然であることが容易に理解できる。具体的には「孝二」が「選ばれた子」として設定されていること、作品全体が完全な絶望を描かず、むしろ希望と明るさを感じさせるトーンを保っていること、そして、一度完結したはずの作品が幾度も延長を繰り返しながら破綻せず続けられたこと、関連して、続編に進むにつれて「孝二」に代わる少年があたかも世代を交代するように配されたことなどである。

ここで構造の一致を示したのは『橋のない川』の執筆にあたつて住井すゑが『玉杯』を始めとする「立志小説」の諸作品を参照した可能性を指摘しようという意図によるものではない。住井すゑという作家は児童文学の作家でもあり、また、先に触れたように正式なデビューと前後して「変名」で「童話」を複数執筆していたという点を忘れてはならない。住井すゑは「立志小説」に限

らず、より大きな意味での少年文学、児童文学の方法に熟達していた。いわば、自らになじんだ手法を『橋のない川』という大作に投じ、見事に使いこなしたとみるべきである。『橋のない川』は児童文学ではないが、物事の深刻さよりも希望の側に寄り添い、暗さよりも明るさを描き出して見せることは、対象読者の制約を持つ児童文学では当然のことである。『橋のない川』は児童文学、特に「立志小説」のスタイルを用いて書かれた非児童文学である。近代文学史上での評価と位置づけが遅れた理由の一つには、この作品が近代文学の主流からも児童文学からいわず両者の盲点に入っていたためであると思われる。

作品の最初の延長が行われた時点で第一部・第二部を「少年篇」、第三部・第四部が「青年篇」とされたことを思い返してみると、この「立志小説」としての性質がいつそう明らかになる。

幼少時から小学校を経てやがて青年へと成長してゆく「孝二」はその段階に応じて知識を拡大し、視野を広げ、身の回りの日常からやがて日本社会全体へと世界を広げてゆく。この認識の広がりとも深まりはそのまま作品主題の深化とも関り、さらに読者の認識の広がりともリンクしている。「孝二」は作品の視点人物であると同時に作品が掲げる理想の体現者であり、読者にとってのガイドでもある。長大な作品を読み進める中で「孝二」とともに読者もまた成長してゆくのである。全国水平社の結成を山場として「青年篇」で一度の完結が想定されたのも当然である。少年が青年となりある種の完成を迎えてしまえばそれ以上の世界の拡大は望めない。その先に待つの「孝二」による社会運動への参画そ

のものと成るが、住井すゑはそのような未来を「孝二」には用意していない。より極端な言い方をすれば、そのような続編は用意できないのである。というのも、部落問題、差別問題といった作品の中心主題が作中時間はもちろんのこと現実世界の現在においてもなお解決を見えないためである。「孝二」が加わるはずの実際の社会運動に大団円を接続することは原理上不可能である。仮に運動へと身を投じる「孝二」を描き出すとすれば、そこには克服不能な苦闘、あるいは、挫折が待ち構えることとなる。論理が倒錯するが、そもそもそうした困難があることを承知していたからこそ、住井すゑは「立志小説」の枠組みを用意し、深刻な主題を扱いながらあえて希望を描き出すことを選んだのではないか。

ここで改めて、「立志小説」の構造によって得られた利点として『橋のない川』が何を達成したのかを列挙すると次のようになる。

①「少年」の視点を利用できる。

中心となる人物が「少年」であれば、その成長に伴って視野の拡大、認識の変化を物語の進行に応じて発展させることが可能となる。あたりまえのことのようであるが、『橋のない川』の主題が差別問題ならびに日本の社会構造の告発にあることを考えれば、この利点は極めて大きい。また、「少年」という立場であるがゆえに社会との関りはその年齢と生活圏によって自ずと制約を受けるため、作品にとって不都合な社会的事件や、現実的な社会運動、それにまつわるトラブル、いうなれば「暗黒面」に触れず

に済む。孝二が少年から青年へと成長するにつれて孝二に変わる少年が登場するのも、このためである。孝二は次の少年を導く先輩としての立場を改めて獲得するが、「立志」の先にある、社会運動あるいは闘争という場面にはついに身を投じていない。より強い言い方をするなら投じないで、むやみに、作品を完成させることができたのである。

② 作品が教育効果を持つ。

前項と関連するが、少年の気づきに応じて新知識、複雑な情報、あるいは思想的背景を会話または本文での解説的叙述によって補足し、登場人物が何かに気づく時、同時に読者にも新たな気づきを促すことができる。「少年倶楽部」に代表される戦前の児童・少年文学は読者である少年たちに物語を提供すると同時に、歴史、科学、社会といった知識をも同時に教育的に提供してきた。この点でも『橋のない川』が少年文学の流れを汲んでいる。

③ 定型化した主軸に付随させて内容を拡大できる。

少年の立志という主軸を保ちつつ、付随する事件やその状況を時系列的に追加することができる。この時系列的な追加という方法は『橋のない川』第五部以降で特に顕著である。作品のある部分で取り上げた事件を後の章で解説的に取り扱うことも、ある事件に関する複数の視点を後に取り上げることも可能となる。比喩的に説明すると、本線から支線を分岐させたとき、支線を本線に復帰させずにそのまま部分的な終点を設けても全体が崩れないで済むということである。そしてその結果として、

④ 「結末」を設定せず作品を延長できる。

統編を数度にわたって書き継いでも破綻を来さないのはこのためである。

こうして、作品の結末を現実で到達不能な大団円に向かわせることも、やがて訪れるであろう挫折や悲慘を描くこともせずに、ある種の希望と「明るさ」を保ったまま主題の追求を続けることが出来る。作中時間が進み、作中人物が年齢を重ねるにつれて、入れ替わるように新たな少年が投入されたのはそのためである。学び続け、自己を形成してきた孝二が、こんどは先達として新たな少年に新たな知識と認識とを教育する形式がここに成立する。

『橋のない川』は「立志小説」の枠組みを利用することによって大河小説へと発展していった。「孝二」の設定も作品が持つ不思議な「明るさ」も、主題を追求しながら読者への教育と啓蒙を行うことも、全ては一体のことである。おそらく、住井幸雄が第八部、第九部と、さらなる統編を書き継いでいたとしても、おそらくこの構造はどこまでも反復されることになったはずである。

『橋のない川』は終わりのない小説であり、終わらなくても良い小説であり、どの部分で完結しても良かった小説なのである。ライフワークという呼称はこうした作品にこそ相応しい。

おわりに

基本構造と文学史上でのおおよその位置づけを行ったが、今後の課題として『橋のない川』の内容の詳細を検討する必要がある。特に本論で触れた現実とフィクションのバランスが如何なる

方法、いかなる配分で構築されているかを明らかにしなくてはならない。実際の事件や情報がどの程度反映され、逆に、どのような事象が作中から消えているかを明らかにすることは、作品成立の過程を考える上で特に重要である。また、作品が受容された過程とその読者からの反応が作者にとって、作品にとってどのような生かされているかも考察の対象となるだろう。いずれにしても、『橋のない川』の研究は端緒についたばかりである。

付記

二〇一七（平成二九）年、遺族の犬田かほる氏より住井すゑの旧邸宅が牛久市に寄贈された。牛久市からの委託を受け、東海大学の調査チームが邸宅内の調査を行ったところ、原稿、執筆資料、書簡をはじめ、旧蔵書や遺品などが多数発見された。特筆すべきはその中に『橋のない川』の自筆原稿と創作資料が大量に含まれていたことであり、現在、その整理と内容の精査が進められている。本論はその調査の一環として書かれたものである。

註

- (1) 岩倉昇氏作成の「住井すゑ年譜」による。『住井すゑの世界その生涯と文学』（解放出版社／二〇〇一）
- (2) (1)に同じ。
- (3) 講談社の社名は大日本雄弁会、大日本雄弁会講談社、講談社、と時期によって異なるが、本論では便宜のため「講談社」で統一する。

- (4) 資料が乏しく、証言も曖昧なためこの特定は困難である。新出資料によって何らかの解決、進展がみられることを期待したい。

- (5) 『キング』の時代 国民大衆雑誌の公共性（佐藤卓己／岩波書店二〇〇二）

- (6) 『少年倶楽部時代』（加藤謙一／講談社・一九六八）および『少年倶楽部』と読者たち（岩橋郁郎／刀水書房・一九八八）

- (7) 『全国旧制高等学校寮歌名曲選』（ことのは会／春秋社・二〇一三）

- (8) 『あや玉杯に花うけて』（佐藤紅緑／講談社文芸文庫／講談社・二〇〇四）また、少年文学およびその後の漫画では作品にタイトルとは別に読者の参考とするためにジャンル名を冠することが広く行われていた。この習慣は戦後まで引き継がれた。一例だが『ブラックジャック』は当初「恐怖コミックス」のちに「ヒューマンコミックス」と改められている。

- (9) この時代から戦前にかけての講談社の雑誌には多数の「立身出世」に関する広告が掲載されている。「少年倶楽部」の背表紙にはほぼ毎号「中学受験」「独学」の宣伝が印刷されている。また、当時の少年たちにとっての進学、学歴がいかなるものであったかは『学歴貴族の栄光と挫折』（竹内洋／講談社学術文庫／講談社・二〇一一）に詳しい論考がある。
- (10) 正確には住井すゑ・犬田卯邸。犬田卯（一八九一―一九五七）は住井すゑの夫で作家。

(11) 調査にあたっているのは東海大学伊藤一郎（代表研究者）以下、安達原達晴、早乙女牧人、千金楽健の計四名。

*なお本文の引用は『住井すゑ作品集』（新潮社・一九九九）に抛った。

（ちぎら・けん 本学非常勤講師）